

かコノ皆の衆未だ若い故この難義を知らぬも道理だか吾が身をつめり人の
痛さを知れとはこの事今あの通り一命の危さより救助を乞ふは吾れ佐渡に
て難舟の時の気分とは同じことそれを思へばこれがマア見捨て乗り過ご
さりやうか斯まで云ふて皆衆の耳に入らざれば此の年寄は生て甲斐ないも
のなれば假令死するも彼の四人を救けにや置かじと白髪を振立て、説諭せ
しに多くの舟子もその誠に感服しけん各綱を投げ辛じて四人を救しが頃
しも寒氣の時なれを身体冷へて氷の如く只一言をも云はざるを舟子は各々
己の衣服を彼れに着せ火を焚き身体を温めし中難なく舟は下の關へ着しか
は旅金を與へ歸へせしに四人は涙を流し首を地に附け何處の何人か知り舛
せぬに斯く大恩を蒙りし上又此通り旅金を以て實に有難ふふりすすせめては

後日御恩の万分の一を報ん爲め貴名の御住所御姓名はと云ふを打ちけし舟
頭は何處の誰れと云ふ程のものでなく又た世の中は相持で救けたり救かつ
たりと云ふものをソヤ深く禮云はれては却て迷惑それよりか留守には家内
衆も定めて案じらるゝ程に早く歸りて安心さすがいと懇ろに云ひしかば
四人は喜びを彌増して袖に面を覆い舟子一同に禮を述へ岩屋浦へと歸りし
よ浦の甲乙も感泣にひせば是れと云ふも清右衛門殿が日頃の神心故と一同
敵神の念を生し爾來怠らす神恩報謝の祭典をなしげるとか嗚呼白髪の老人
に大神よりの御分心なる誠なくんば何ぞ四人の生命を全くすることなら
ん而して其の四人その誠なくんば何ぞ誠の救助を受けんや

◎丹誠を凝らし父の病氣平癒す

筑前國遠賀郡岩屋浦に居住する花房清太夫は(四十年)舊黒田藩主の家臣にして該浦の砲臺詰の命を受け居たりしか此花房清太夫は明治十二年頃より神風講社に列し其後神道黒住教の教旨を奉戴し大に悟る所あり教會所に盡力し村民を誘導し夫か爲に敬神尊教の人も比々相増し村内大半講中に列したる程の篤實家なるか或る夕方長男蛟と云へるか學校より歸る際父清太夫は釣魚を料理せしがフト中風の病を發し其の儘後へ倒れ恰も死人の如く正氣を失ひしか心蛟を始め家内の者の驚き大方ならず如何はせんと互に面見合せ居たりしが長男蛟は素より尊教の人にて已に先年黒住教四級信徒の命を受け尙又禁厭の神傳をも授けられし程なれば兼て御道を修行する眼目は茲なりと心は大盤石の如く抑鎮し氣分は朝日の如く勇ましくせよ我をはな

れよ天に任せよとはことなりと勇み神前に進み大音にて神言を奉讀するこ
と須臾くする中誠心講の人々も次第く集まり來り一統誠心を神明に誓
ひて所念し清太夫の枕邊に寄り厭禁を授與せしかば遂に言語を發し四肢自
由を得る程に御靈驗を蒙りしは去る明治十四年九月中旬の事なるがその十
月中旬よりは業を營み無事健康の人となりしとか實に神徳は貴とけれ
◎神徳より病氣平癒し杖を棄つ
備前國赤磐郡(舊赤坂郡)の或役場に使はれて日々岡山藩府まで飛脚と
して往來する老爺ありける齡既に六十路の上を七ツ八ツ越ぬて彼の疝癩て
ふ病に惱み腰切りに痛みて耐がたく兎や角杖にすがりて歩行くにも一町往
ては腰を伸し二町歩みでは脊を打ち苦しき限りなきに斯では遠路を往くに

飛脚の業はなるべくもあらずとて是止めては吾糊口の便もなしと願て
 困じて有けるに或人の進めに岡山より遠からぬ中野なる黒住御大人の禁厭
 こそ此頃諸人有難く申すなれ往て願申してよと云ふに老爺聞て此上なく打
 喜ひ即て中野に詣でたるに折ふし教祖は他に出まし御門人の方が町傳に養
 心法神明の陽徳を説き授けしかば此の老爺正直なる心の一筋に身も我も病
 も打捨て有難きと思ふ誠の心を養ひしかを自ら神の誠の影さやかに病の雲
 霧は自然の風のはらひ捨て向ふ物事有がたくなりゆき痛みなど忽ち春たつ
 朝日の雪永の解るが如く癒去りて四里五里の往來苦もなくなりけるにぞ尊
 さのあまり日々二里程も迂路なる中野に参り詣でも折や悪かりし未だ一
 度も教祖の御在宅なるに遇まいらせすいかて御顔を拜みたく念じありける

に一日曲り松と云ふ所にて始めて往逢ひ申し向ふより相貌甚尊とき方の
 歩行來せるが信心一途の老爺が心に彼方には坐すやと心づきしかば腰を屈
 め恐れながら黒住の大先生様には在し坐すやと問まいらすに拙者こそ黒住
 左京にてゐると御答へありしかば老爺は三拜九拜地に伏し拜み賤奴事御蔭
 にて先日より誠に有難き仕合せこそ蒙りたりと申しけるに教祖聞玉ひ何心
 なくそは何か金儲けでもなされしかと云給ひしに老爺イヤ賤奴御蔭にて誠
 の元の身と立歸りし有難さハ錢儲けなどの及ぶ事には侍らす杖も斯く入ら
 ざる様なりしと其處に投棄たるに教祖不圖心付給ひ過てりく有難きとは
 錢儲かど云ひしことまた我胸にきたなき貧欲のわれびも誠難有く神の御
 心と吾心と一ツになる是れに増したる難有き事の有べきことかはと其御杖

を投棄て神明を三拜九拜し給ひしは實に彼も是も誠の一筋なる所にて斯て彼の活靈の御神徳をなとか得ざらんされを彼の老爺是より全く杖も入らず健かに五里六里を日々往來しけるとぞ亦教祖も是より七十三四の御齡に至玉ふまで御杖は取らせ給はざりしとか

◎神徳を蒙りて賊難を免る

教祖の御神徳が日々月々四方に顯はるゝは能く人の知らるゝ所なるが岡山門田屋敷に住み居ける士族薄忠作方へ或夜強盜二三名襲ひ來り忠作を始め家族の者まで殘らず引き縛り置き衣服を盗み出し其上厨にわりし酒飯を取り出し満腹飲み食ひせしが忠作は平生教祖の御蔭を蒙りし信心家なれを縛られながらも一心不亂に胸間では御杖を默讀して居りしかバ忽ち有り

難き御神徳の顯れしにや確と縛りし繩も自然に緩みければ其儘戶外へ飛び出で火事しやくと大音に叫ぶや否や東北西隣の者どもはソリヤ大變なりと云ふ聲と諸共に打集へば賊等は盗み歸らんとて取束ね居たる衣類并ひに彼か自ら携帶來りし木履手拭など捨て置いて逃げたりとは全く教祖の御神徳によりて賊難を免れたりと云ふ實に難有き事ならずや

◎靈夢よ和歌を賜りて老病治す

黒住教故大教正兼大輔教 正五位森下景端

右森下翁の本教に於ける功勞の夥多なりし事は國の教なる雜誌に委數誌してのれば茲に贅せず唯靈驗の二つを記さんに明治廿三年中の事なるが本教教師平松規矩治氏の老母重き病にかよりければ醫療は素より禁服等にも手

を盡すと雖ども其效驗なく九死の場合に至れり規矩治氏は晝夜傍を離れず
看護して居る中九死と思ひし老母不計病禱より起き出てたれば規矩治氏を
始め看護の者共大いに驚き如何なされしやと問へば今森下様の御入に相成
り御呪下され其上御歌をも賜はりしと云ふ看病人夫れは全く夢ならん先づ
御鎮り被成と云へば老母決して夢にわらず今森下様御歸り成さるゝゆゑ御
見送り申上ねばならんとて頻りに起き上らんとするを色々をしながらめ氣
の鎮まるを待ち右夢中の歌を尋ねれば

わづらひの花咲けばこそ世の中に

神となる實を結びましけめ

と明らかたに云ひ給へるや既に九死と思ひし老母の病氣大に快くなり引續て

全快したるよし

因曰かゝる事も森下翁は更に知り玉はねども幸御魂の働きならん

◎癩病治して神恩に報酬す

教祖第三代宗篤大人の御在世中加賀國より新谷權次郎と申病人大元へ參
りたるが其病氣は癩病よて惣身の色かはりて血膿流れ出で眉毛は抜け眼は
見ゆす歩行も漸く一足づゝ引づるが如く極難澁の体なるを宗篤殿不便に思
はれ懇ろに斯道の教を説き聞かせ度々お呪を施し玉に向詰合の教師も交る
く御呪致しく内追々惣身より流るゝ血膿も止まり又眼も見ゆ順次おか
げを受けて眉毛も人並より濃く生ゆ壯健の身体となりたれば神恩報酬の爲
め最初は黒住家屋敷廻りの掃除等を致し萬事に心を付けて叮嚀に仕へ後には

大元よて働さを爲して少々の給金を貯へ神恩に報ひ奉らんが爲め御本社南
手の石橋を一人して寄附致し終始十余年間一日の如く誠實を以て盡せし其
精神感すへきもの也

因云本教内には癲病の治りし者枚擧に遑わらずと雖とも汎く人に知ら
るるを厭ふ者もあれば教師たる者其病体と其人とを取捨酌量し又奇
談に亘りて迷ひ生ずる様の靈驗は猥りに吹聴せざる様慎むへきこと也

◎神明の御加護を蒙りて病氣全癒す

愛媛縣伊豫國越智郡今治村に住み居ける級外一等教徒渡邊好太郎氏は彼の
地に於て信徒家の其名も高さ一人なるが過る明治十四年の五月頃より肺の
臓を痛み出し七月中旬に至り一層病勢を増したるも恒に精神を養ひ劇病に

正解して居る中同じく其の父は別々秋葉の津山殿番なれども解は
其身に於ては神恩の賜なりと信じて居りて其の病は漸く癒はれ
用するより又亦宿願の御神徳を蒙る言ひし事出掛れば神
は合衆の病氣手廻り祈りたるの精神を籠めて日々數十度の神言を唱へ居り
るが如く即氏は終に唱言がら病癒所へ至り臥床に就きたる所夜半の頃
より不問然し腹腹をけなみ出し若しや胸に行ひて泄洩したるには快
からぬと思ひけりや御神して標則を以て出するを行き倒れながら眩しく吐血
して其の病癒したるも漸く臥床にはいく就寝呼吸ゆるる状態なれ
ば即氏は神明の加護を仰ぐの外なれど一止不離に天啓大徳を蒙る

大元よて働きを爲して少々の給金を貯へ神恩に報ひ奉らんが爲め御本社南
手の石橋を一人して寄附致し終始十余年間一日の如く誠實を以て盡せし其
精神感すへきもの也

因云本教内には癩病の治りし者枚擧に遑あらずと雖とも汎く人に知ら
るゝを厭ふ者もわれは教師たる者其病体と其人とを取捨酌量し又奇
談に亘りて迷ひ生ずる様の靈驗は猥りに吹聴せざる様慎むへきこと也

◎神明の御加護を蒙りて病氣全癒す

愛媛縣伊豫國越智郡今治村に住み居ける級外一等教徒渡邊好太郎氏は彼の
地に於て信徒家の其名も高き一人なるが過る明治十四年の五月頃より肺の
臓を痛み出し七月中旬に至り一層病勢を増したるも恒に精神を養ひ劇病に

匹敵して居る中同廿七日の夕は別宮教會所の宿直順番なれども斯く大患
の身なればとて家族共は宿直を辭謝んと言へども好太郎氏は我家に鬱々屈
居するより寧ろ宿直して御神徳を蒙らんと言ひしまゝ出掛たれば姉ミサコ
は舍弟の病氣平癒を祈らんとて精神を籠めて日々數十度の神言を唱へ居け
るが好太郎氏は終に喘ぎながらも教會所へ至り臥床に就きたる所夜半の頃
より不圖烈しく腹部をいたみ出し若しや廁に行ゐて泄痢したらんには快よ
からめと思ひじにや匍匐して縁則まで出づると行き倒れながら夥しく吐血
して身体彌衰弱したるも漸く臥床にはいゝく就き呼吸絶ゆるの状態なれ
ば最早此上は神明の加護を仰ぐの外なしと一心不亂に 天照大神と聲を發
てば神變不測なるかな神前より颯々たる涼風吹き來ると思ひしや 教祖傍

に立よせ玉ひて宣へるに誠を取り外すなよ道に迷ふなよ病氣平癒するぞよ
 臥床に休めよ明日より一週間籠りをせよとの宣ひ終るとまた涼風神前の方
 より吹き來るに従ひ 教祖は神殿に入らせ玉へるを御後より拜みながら御
 神徳の有り難きを謝し奉ると腹部の痛みは夢の如く癒へ一睡して翌朝に至
 れば氣分平日に異なることなし余り不審ながらも居合たる人々に前夜の次
 第を語り相共に椽側に出でく見れば夥しき黒血ありこれを見る者聞く者御
 神徳の有り難きと好太郎氏ミサコ等の信心厚きを感せぬ者はなかりしと又
 好太郎氏は明治十五年の春より脚氣病を患ひ八月中旬には病勢頗る激烈
 よして殆ど冥土の旅に赴かんと送せしかば一家親族は勿論他人に至るまで
 抛擲がたしとて狼狽周章たるも好太郎氏は毅然撓まず病勢を挫かんが爲め

◎丹誠を抽て大患の疾病癒へ及盲目晴る

或は神言を誦し御陽氣を吸ひ和歌を詠じ精神を養ひ病褥に臥せしがミサコ
 は寸時も早く御影を蒙らしめんとて山脇重明先生を招待し來るや否や好太
 郎氏は忽ち病褥を取片付け自ら先づちて神前に進み出で共々に二十四度の
 神言を奉讀したれを斷然激烈なる病勢も遑易して大丈夫の体軀となれりと
 全く好太郎氏が信徒家の名高きに背かずして御神徳の著るしきを蒙りたる
 の明証ならん又氏は爾后教導職を授けられ布教に盡力し順次等級を経て今
 は精少教正の職までに進まれ日夜刻苦勉勵し熱心よ布教を爲しつゝありと
 人の此世に在りて生涯を苦樂の中に送るは彼の五管となんいふ者ありて心
 の儘に行んと思へば行き爲さんと思へはな一言はんと思へは言ひ視んと思

へは見聞かんと思へば聴き杯する存分が叶ふによりて苦しき事のなる中に
 もまた樂しみがあれはこそ此世の過し渡りも出来る者なるに其世を渡る樂
 しみの第一たる五管中限が働かざれを其樂みも亦少く唯生て居も何の樂
 しき事があるべきや爰に岡山縣下汲口郡大谷村四百五十六番地に住居する
 中島林平と呼者あり其が母清は年久しく眼病に罹り長の年月鬱陶し唯に苦
 しむ斗りなりしが猶且去年の秋頃より不圖した風の心地にて病伏居しが何
 として打捨べきにあらざれば患者は更なり林平も醫藥針灸何に角と心を盡
 し手を盡し治療なせしも効驗なく病は次第に差重り衰弱殊も増す斗り逆も
 現世に今は早存命べくも見ゆざれば親族は更より近隣迄も彼是と一方なら
 ぬ心配し有とあらゆる神々へ祈れ藥れと立騒ぎ看護に怠りなけれ共何の驗

しもなきのみか最早前後もわざまへぬ有様なりしを林平は是非に最一度立
 直し癒さで何逆止むべきと中島村に駆け附けて本教小講義なる宮原秀明氏
 に依頼して祈念を請ひしに四級教徒清水綱五郎氏を代理とし差向られしに
 清水氏も最懇に祈念して御禁厭を授けしが儲難有や不思議にも其日をさ
 かへ重病も訝る斗りに平癒なし清の喜び言ふ迄や家族も共感涙に袂を絞
 りあへりしと斯く験驗の新高く彌貴とぎに近隣も實に此道を尊みて畏みあ
 ひて居たりしが儲林平は常がねに深く御道を信仰なし人の心は 天照す大
 御神の分ち給ひし玉なれば取りも直さず我々が心は即ち神なりと 教祖の
 神の宣ひし貴とさ御教を心に留めて居りしが果して御蔭を受つるも然こそ
 あるべき事ならん夫に就ても此道の實に高大なる事は彼の清が長く煩らひ

居りし眼病も俱に癒て今どしは始めて現世に様々の物見る事の樂しみをせしどて嬉しみ居れりぞぞ

◎靈夢を蒙りて蘇生す

愛媛縣下伊豫國西宇和郡川石村の内宇天井といふ處に清家龜太郎といふ者あり此者常は船かせぎを渡世として同村の船持の家に仕へて諸國へ炭薪材木等を積みて運搬なし居りしが過る明治十七年舊八月は運搬すべき荷物なくして船を休めありければ船主は自宅に居り自分は船番を勤めとして毎夜船中に起臥せり然るに同月十二日の事なるが平常の如く暮れ過ぎ頃より船に行きて伏したる儘息絶へたり斯くとも知らず船主は翌朝に至り龜太郎の朝飯に歸り來らざるを不審に思ひ船に至り見れば龜太郎はよく寢入りたる

狀なり龜やくと頻りに呼起せども更に應せず如何せしやと側に寄りて見れば既に息絶へたる様なり船主の驚き一方ならず尙枕邊にて龜太郎如何なしたりしや氣を大丈夫に持てよと呼べと叫へと身体は氷の如く冷へ渡たれり然れども豫て聞及へるに宗忠神は誠の一心になりて祈りなば仮令死したるものをも蘇生せしめ玉ふといでや斯道の教師を迎へて御蔭を受さしむへしと一心決定して我家に連れ返り直ちに近郷伊方浦に住める權少講義合田善太郎氏を招持し來り祈念禁厭を乞ひけれを合田講義は直ちに御神號を鎮齊し尙近所の信徒等も寄り集ひ共に神言を唱讀し一心不亂に祈念禁厭を施し尙居合せし信徒もかはるく呪すと雖ども更に功驗なし合田氏申さるるに然らば説教を一席勤むべしと高坐に登り音聲高らかに教を説かれければ

其聲總太郎の耳底に達したるかと思ふ程の勢ひにて聽聞する人々何れも低
 頓平身したり斯する中是迄死したりし龜太郎息を吹き返し見る中に起き上
 り我は不思議なる夢を見たりと云へば傍に在し人々打ち驚き如何なる夢を
 見しやと尋ねければ龜太郎云ふ様已れフト山の麓に到りしに頭には冠を戴
 き身には齋服を着け玉ふ御方あり依つて貴方は如何なる御方にて渡らせら
 ると尋ねれば我は其許の産土神三嶋明神と答へ玉ひて此山を越ゆへしと
 の御指揮に依り山を越ゆればその山の次なる麓に又一人の老翁あり我れ御
 傍によりて貴方はと問へば我は黒住右源次(宗忠明神の御幼名)なりと答へ
 玉ひて又此山の次に登るへしと宣ふに隨ひ登り行きもはや絶頂に到りしと
 覺しき時は所謂曙の空なり其山嶺に何に譬へんかたなき神のおわします

と見て御名を問ひ奉れば我れを知らぬ者はなしと答へ玉ふされど我心には猶
 分らざるにより敢て問ひ奉れ我は世の光なりと答へ玉ふ聞くより早く夢
 さめたりとの事に一坐の人々御神徳の難有さに感泣したりと云ふ
 因に曰教祖の神詠に「我姿尋ぬるにまた及ぶましたる天地に照りわた
 るもの」とあり天地に照り渡るものは恐れながら 日の大御神なり教
 祖は日の神と共に天地に照り渡り玉ふ御高德なれを津々浦々山谷の一
 軒家に住みて斯道の何たることを知らざるものも一心決定し形の事を
 忘れ誠の一心になりて祈り奉りなむ或は靈夢に顯れ或は御姿を現はし
 玉ひて病氣は素より死したるものも蘇生するの神庇を蒙りて家業を働
 き忠孝を勤むる人になるとは目出度ことなり又産土神は其地を掌り玉

ひて蓮子を常に守り玉ふ神徳の尊きことを思ひ常に信心を怠らず勤め
たきことなり

◎外人御蔭を頂き神徳の尊さに感佩す

長崎縣長崎港に宇下り松と云ふ所あり其地四十七番邸に在留せる支那の國
廣東の人にて大工職を業とせる徳興號余林慶(三十六)は明治十二年頃より
腰痛を發し殆んど痼疾の如く成りて常に難義せしが剩さへ近年は痼飲症に
罹り殊の外惱みたりしが全十五年十一月頃に及びては病勢益々差重り最早
危篤に至りければ此上は 神明の御蔭を受けて危難を免かるより外なしと
思ひ込み同月廿六日に禁厭施受の義を懇ろに本教長崎中教會所へ願ひ出し
より其は氣の毒なりとて早速同所詰合の教導職方を始とし教徒等も出張の

うへ祈願を込め且つ禁厭を授けられしかばわら難有や畏くも前に陳へたる
如き數年の難症に罹りて手の下さへ危き程の病も即座に緩を覺へしが其夜
快く寐ね翌朝に至りては増々快よげなる有様なれば其夜は自分に車に打
ち乗り該教會所へ參詣し偕 御神前に打向ひ一心不亂に 神徳の有り難き
を拜し涙を流して喜び尙今一度何卒御禁厭を受け貴ふとき御神徳を蒙り度
とて願ひ自から 御神前に座し幾度となく伏し拜みし有様は誠の心現れて
見なければ詰合の方々も猶不慙に思はれ心切に又候禁厭を授けられしが忽
ち快復に及びしより愈々御神徳の新たなるを喜び直ちに我居宅の内に淨け
き神床を設け置き御神號を齎さ祭りて朝夕伏し拜み抔し其教會所結收なる
一君萬國統御四海泰平大祈念の月次執行千度枝にも加盟し増々怠りなく手

厚く信心せり翌年三月 教祖の御祭典に自から八足の小机を造り奉納なせしとぞ實に御神徳の廣大なるは申すも更なり實に此道の教は已が活物を以て天地の活物を呼出すなり其活物が即ち誠の本体なりとの御教なれば其誠の本体こそ 天照大御神なり 天照太御神は天地萬物九活しの大御徳内へ何國の誰人に限らず只今迄邪の道に迷ふたる者にも既に我を離れて誠の心一つになるときは即ち神なり神になるときは天地自由自在なる故斯の如き御神徳を蒙りて御教の旨趣を悟るときは如何なる病も治るは道の入口にして伊呂波の伊の字の片爪をするよりも易く治る物なり然れば余林慶の上に見れ斯る貴き御蔭のありしからは増々廣大に及び愈々誠の心を持ちて此道の貴きを知り彼國の先導者と爲りて導きなば必ず彼國の人々も此大道に感して信せざる者なきに至るべし

◎稟生不具者自由健康の身体となる

凡そ人の世に在るは健康なるより尊きはあらぬへし富士の山なす黄金寶を懐くとも身に疾病ありもせばなどか心の樂しからん況して稟生不具者となりて不自由に此の世を送る其憂は如何はかりにありつらん側に見る眼もいぢらし、茲に説出す一條は明治十六年の事なるが處は幡磨國安栗郡河崎村なる溝田嘉三郎は世に云ふ子寶澤山にて娘五人あり其が三女に照とて其年早二十五になりね而して眉目も最麗しく性質伶俐にありつるが哀む可きは生付ての不具者にて兩足は内股に回り込み甲平もて杖をば力にて歩行ぬる様は見るとあらぬ姿にて誰とて斯くも美しき顔もて何とてあわれ斯く不

自由よと憐まざる者はなかりき當人も常に身の不幸を嘆き啣ちて世に在る
 心持はなかりしが今を去る明治十二年の秋のかた廿二才の時一日隣村なる
 黒住教導職大住太内史船宗平兩氏の説教を聴聞せるより道の教の尊きを知
 り得て後は毎夜く殊勝にも雨風の厭ひなく聴聞に到りぬ斯くて五日目に
 至り朝未明より起き出で、兼て聞き得し如く東の方に向ひ朝陽に對し一心
 不亂に拜み祈願を込め居たる折しも思はず兩足はちりくくと伸けれを一た
 ひは驚愕し且つ喜び天にも登る心地してあら不思議ありがたや今 天照太
 御神を拜み奉ると常に愛し此の身の不具足が伸びた母様よと云ふに母親は
 更なり姉妹も飛び出で此体を見て天に拜じ地に悦び如何なる今日は吉日ぞ
 神の冥護は斯どとも知らぬ人こそ疎ましけれと以後は彼處此處の誰彼にも

神徳のあらたかなるを物語り家内一同益々信仰怠りなかりしと夫より照は
 三年の間に全く人並の者とはなりて明治十四年には大元へも御禮詣なし今
 日此頃は我家より四里ばかり隔たりし山崎なる教會所へ詣拜する程になり
 しかは近所の人々嫁に貰はん聲に行かんと引手數多の身となりしとは實に
 神徳の加護にして聞く者誰れか斯の道の尊きを悟らまじありがたき教ぞよ

明治三十三年十二月廿一日印刷
明治三十三年十二月廿五日發行

(定價金三十錢)

著者 山本貞治郎
著者 三木惟一

岡山市大字東中山下百七拾貳番邸寄留
發行人 河本益二

岡山市下出石町壹番邸

印刷人 大久保石太郎

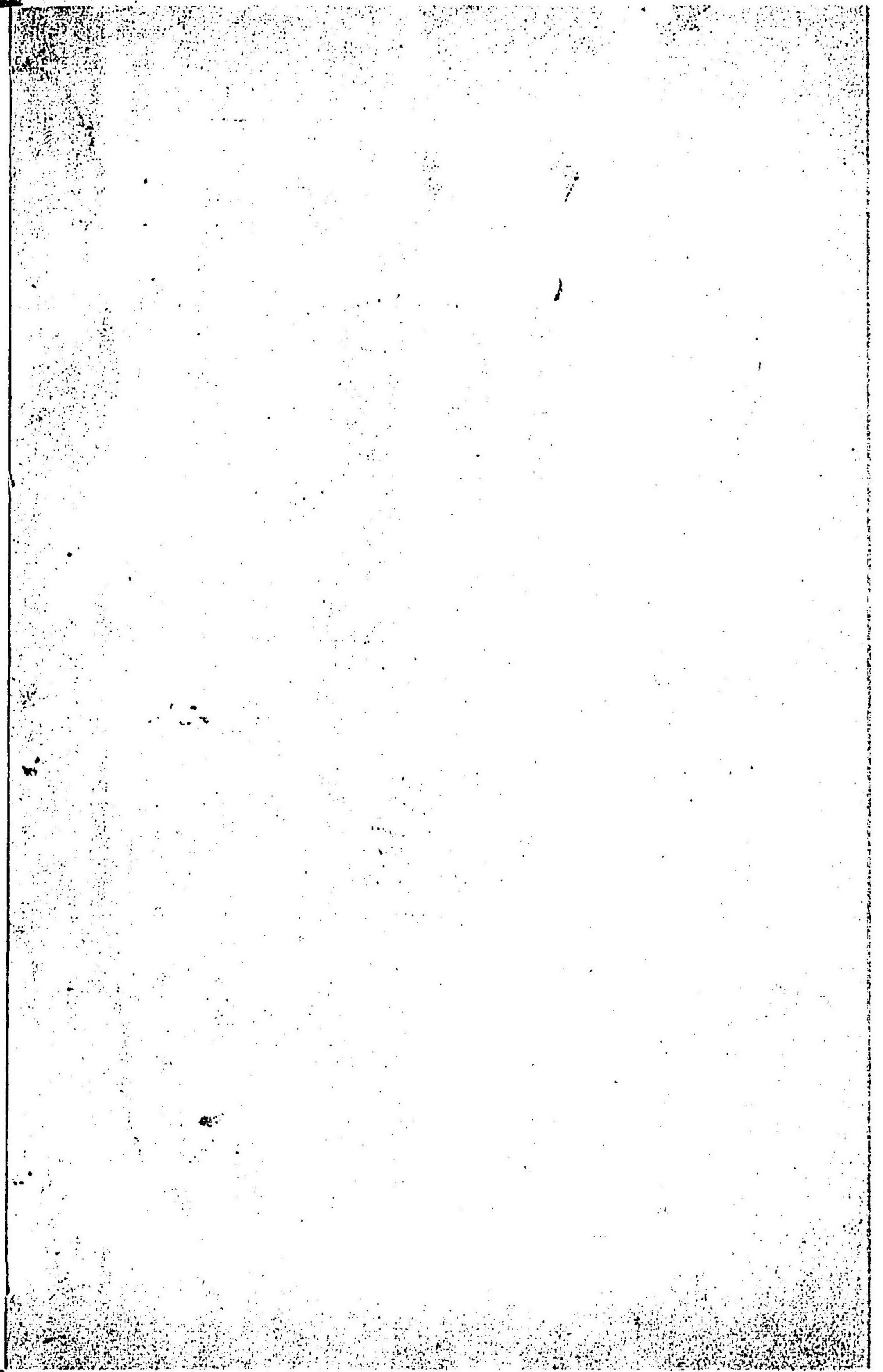
岡山市下出石町貳番邸

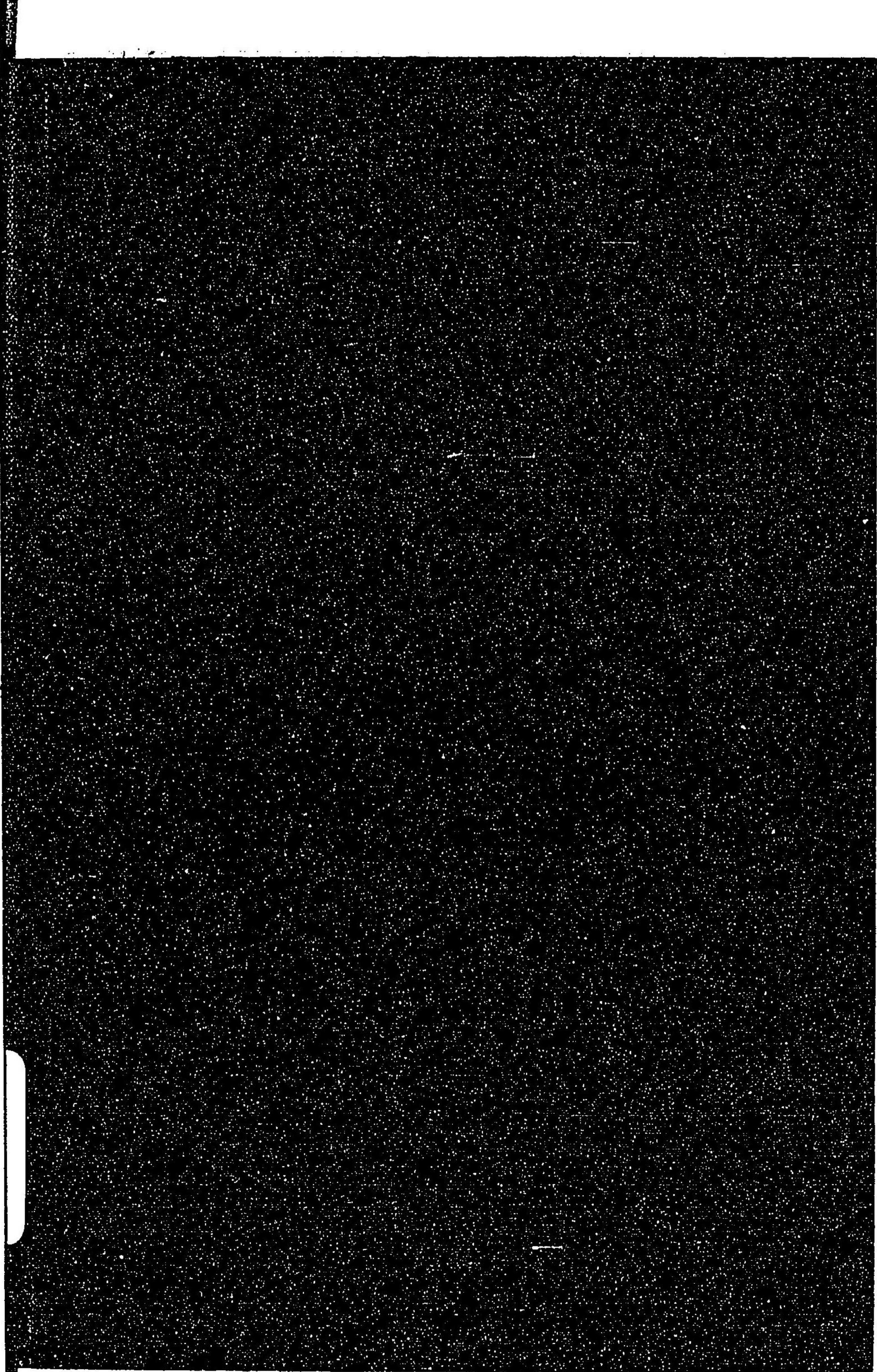
印刷所 大久保活版所

岡山市東中山下百七拾貳番邸

發行所 國の教社

不許
複製





特18

718

靈 頭 集

1

国立国会図書館

014704-001-8

特18-718

靈驗集 第1-2編

山本 貞治郎

三木 惟一 / 著

1冊 (199P)

M33-35

ABB-1145

